

60
702



始



00

702

究研新的學科

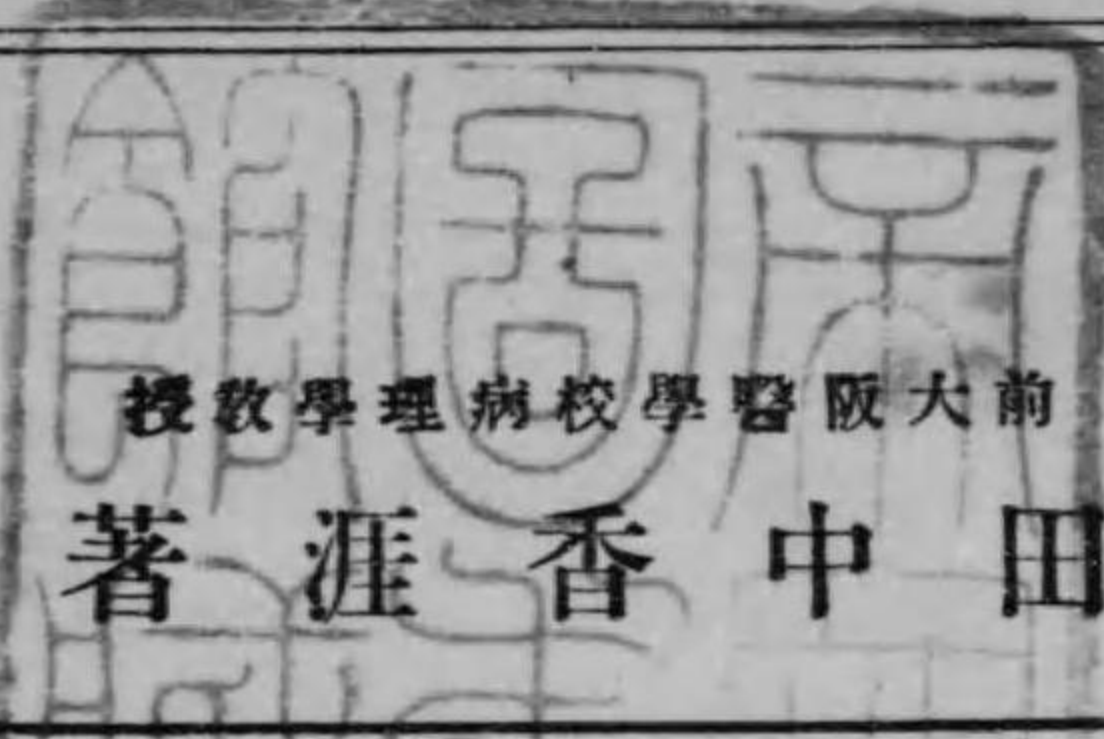
識知新庭家

—3—

著涯香中田

六堂 號屋版大京東

60-702



前大阪醫學病理解學教授

田中香涯著

家庭新知識

第三輯

東京・大阪屋敷發行

大正
10 7. 14
內交

家庭新知識發行の緒言

歐州戰亂中、久しく輸入の杜絶せし獨逸の學術雜誌も漸く近頃になつて再び我國に這入つてきた、私共にとりては、さながら大旱に雨霓を仰ぎ驟雨に逢ひえたるが如き心地がする、一々讀んでみると、流石は學者の淵叢學問の王國たる獨逸だけあつて、新研究新發見の報告が頗る多い、あれ程世界戰爭に依つて一大打撃を受け疲弊困憊の状態に陥りながら、依然として學術の研究を怠らず、陸續新しい研究を發表して世界の學壇に異彩を放ちつゝあることは實に驚嘆せざるを得ない、之を我國の現狀に比すれば天淵の差も嘗ならずである、そこで私は新刊の獨逸學術雜誌の記事の中から、一般の人々の讀んでも利益になるべき衛生療病上の新研究新事實を摭採し、通俗平易の文を以て之を我が國民の家庭にも紹介普及するの要あるとを切實に感じた、本書發行の動機は實に此に

ある、尤も我國にも家庭向きの書籍雑誌は可なり多く發行せられてゐるけれども、其の大部分は今に尙ほ低級趣味を満足せしむるに過ぎない平凡俗悪なもので、世界的新知識を紹述して家庭生活を改善し國民の衛生的思想を向上せしむべき書籍雑誌に至つては曉天の星辰も管ならぬ程乏少である、私が淺學非才の身なるをも顧みず、揣らずも本書の發行を畫することゝなつたのは畢竟上記の如き缺陷を充たしたいからで、東京の大阪屋號書店濱井氏に相談し其の快諾を得たる結果、愈々茲に本書の發刊を斷行することゝなつた。

本書は最初定期刊行の雑誌として世に出だす積りであつたが、出版者の方都合で、書籍とすることゝなり、毎月若くは隔月一回不定期に發行することに改めた、雑誌にしても書籍にしても、執筆者たる私に取りてはどうでも好い、衛生療病に關する世界的新知識を一般家庭に紹介普及するを得ば私の目的は達するのである。

本書は前述の如く主に新刊の獨逸學術雑誌の記事に據り、我國民に眼新らしむ新事實新研究を紹述するのが主要の目的であるが、併しまた我國の學者の研究した者でも正確或は確實に近いものは能ふだけ之を紹介するに努める積りである。

田中香涯識

家庭新知識(第三輯)目次

新 知 識

傳染病治療法の革命……………一

スタイナーツハ氏の若返法は信ずるに足らず……………三

徹毒の完全治療の確定に就て……………一〇
(再び花柳病患者拒婚同盟の参考にまで)

長壽と延命……………一四

雑 纂

鶏卵の貯蔵法及び新舊の鑑別法……………二

湯薬の滋養的價値……………三

黒・燒・藥……………四

・ 叢 談

活動と病者……………四七

人口問題と新マルサス主義……………五二

餘 墨

結核豫防運動……………五五

家庭新知識 第三輯

香涯 田 中 祐 吉 著

新 知 識

傳染病療法の革命

(一)

傳染病は今夏こそは諄々しく説く迄もなく、顯微鏡でなければ見えない么微生
 活體即ち細菌或は原蟲の體内に侵入するより起る處の疾病であつて、各種の傳
 染病は、それ／＼一定の病原體がある、例之ば虎列拉はコンマ菌、腸窒扶斯は
 窒扶斯菌の傳染から起るといふやうに、傳染病の種類異なるに従ひ、其の病原

傳染病療法の革命

なる細菌も異なるものである。而て傳染病に於ていろいろの症状や變化の起るのは、體內に侵入せる病原體が發育増殖して、有毒なる化學的物質即ち毒素(トキシン)を發生し或は病原體なる細菌體內に存する毒素の游離して身體の組織を犯すに由るのである。だから、傳染病患者に認むる所の熱發、頭痛、食思缺乏等の一般症状を始め、特殊症状、例之ば虎列拉に於ける吐瀉、腸窒扶斯に於ける下痢、下血、肺結核に於ける咯血、呼吸障碍等の如き症状は、其の病原なる細菌の含有せる毒素又は其の產出せる毒素の作用によつて組織臟器に一定の病理的變化を生ずるより起る處の異常的生活現象である。さりながら、傳染病なるものは、自然に治癒する特性を具へてゐるもので、輕症な場合には別に醫藥を用ゐずとも自然に治癒することは周知の事實である。それは何故かと云ふに、吾人の身體は一種靈妙なる機能を具へてゐるもので、體內に細菌の侵入し、其の生産し或は游離する毒素によつて組織臟器の障害せらるゝ時は

當該細菌を溶解死滅し又はは毒素を中和して無毒にする所の特殊の對抗性物質の發生するからである。而て細菌を溶解して死滅せしむる物質を稱して「抗體」(アンチケルヘル Antikörper)と云ひ、細菌より產生する毒素を中和して無毒にする物質を「抗毒素」(アンチトキシン Antitoxin)と云ふ。傳染病の内實布埜里及び破傷風の如き疾病は、體內に傳染せる細菌より產生する處の毒素の作用より起るものであるから、従つて此等患者の體內には細菌の毒素を中和して無毒にする「抗毒素」が出来、又た虎列拉、窒扶斯等のごとき疾病にては、細菌體其者を溶解して之を死滅せしむる「抗體」が發生する。此の如く傳染病に於ては「抗毒素」或は「抗體」の體內に生ずるから、自然に治癒する性質を有つてゐるのである。されば一たび傳染病に罹つて治癒したる人間や動物の血液内には、其の罹つた疾病の原因たる細菌を溶解し若くは其の毒素を無毒にする對抗性物質を含んでゐる。固より此の物質の體內に存在する期限は傳染病の異なるに従つて

長短の差があり、或る傳染病では僅か一二週間位に過ぎないこともあれば、他の傳染病では半年餘乃至猶ほ以上にも亘ることがあるが、兎に角、傳染病に罹つた者の血液中には、其の罹つた傳染病の病原たる細菌を溶解し或は其の毒素を中和する特殊の物質が出来る故、此の物質の体内に存在する限りは當該傳染病に再感することは無い、之を稱して「免疫性」と云ふのである。

以上の事實原理を實際に應用して傳染病を治療する方法が即ち「血清療法」である、これは先づ細菌を動物体内に注入して人為的に傳染病に罹らしめ、以て抗毒素或は抗体を發生せしめ、之を含有する血液を採取して其の血液より水分即ち血清を取り之れを實際に使用するのである、而して此の血清を稱して免疫血清と云ひ、傳染病患者の治療に用ゆるのが即ち血清療法である、蓋し傳染病の初期に於ては其の患者の血液中には對抗性物質の未だ發生せず或は發生してゐても猶ほ少量であるから、此際免疫血清を注射して一舉に細菌を溶解し或

は其の毒素を中和して早く其の傳染病を治癒して了ふのが血清療法の目的である、併し時期の既に進んだ傳染病又は初めから重症の経過を取る傳染病に於ては、細菌の發育繁殖が甚だ盛んであり、又た毒素の産出量が夥多であるから、假令抗體或は抗毒素の發生しても其の力遙かに之に及ばず、爲めに患者は細菌及び毒素の猛烈なる勢力のために組織臓器の甚しく障碍せらるゝ結果、死亡することになる、それ故、血清療法と云つても、傳染病の初期又はあまり重症ならざる場合に於てのみ効を奏するのである。

是を要するに各種の傳染病はそれ／＼特殊の病原體の体内に侵入するより起り、而てその病原體たる細菌又は產生する毒素に對抗する物質即ち抗体或は抗毒素の血液内に發生することによつて自然に治癒するので、此の事實を應用して早期に傳染病を治癒して了ふ方法を血清療法といふのである、それ故、傳染病の治療法に使用する血清、即ち免疫血清は、いづれも特殊のもので、即ち虎列

拉免疫血清は唯だ虎列拉のみに、登扶斯免疫血清は登扶斯のみに効を奏し、他種の傳染病には効價がないのである。

上記の血清療法の外に、「ワクチン」療法と云ふのがある。これは豫じめ培養したる病原菌に高温を與へて死滅せしめたものを食鹽水にまぜて注射するを云ふのである。此の方法によつて傳染病の治癒し或は豫防せらるゝのは如何なる譯かと云ふに、健康人に之を行ふ時は其の注射せられたる細菌に含有せる毒素によつて身體に反應が起り、其の細菌を溶解すべき抗體の發生するがため、其後、病原體の侵入しても直ちに此の抗體によつて溶解せられて了ふ故、傳染病に罹ることは無のである。又既に或る傳染病に罹れる患者に上記の方法を行へば、抗體發生の量を増加せしめて早く其の疾病の治癒を促がすからである。而して此の「ワクチン」療法も血清療法に於けるが如くに特殊なもので、登扶斯ワクチンは唯だ登扶斯、流行性感冒ワクチンは唯だ流行感冒の豫防及び治療に功を

奏し、他の傳染病には効價がない。最後に一言附記すべきことは、病原菌體に含める毒素又た病原菌の產生する毒素はいづれも其の化學的性質は蛋白質に屬するものであり、又た細菌を溶解し或は其の產生する毒素を中和する免疫性物質も同じく蛋白質の性質を具へてゐることである。

(II)

以上記述せし所は、これ迄一般醫學者の信ぜし處であつて、即ち各種の傳染病にはそれ／＼特殊の免疫性があり、従つて傳染病はそれ／＼特殊の免疫血清及びワクチンによつて治療せらるべきものと確信してゐたのである。然るに最近に於ける新研究は、這般の確信を破壊して、殆んどあらゆる動物性蛋白質は之を人體内に注射すると、上記の免疫性物質と同一の抗體を發生する可能性ある

ことを明かにし、乳汁、普通血清を以てしても能く傳染病を治癒し得ることを證明するに至つた、此くして從來の傳染病の治療法は將に根本的に改造せられんとするのである。

抑々免疫血清、ワクチンの特殊効力に就て疑を挟み、乳汁、健康血清等に存する普通の動物性蛋白も亦た免疫血清やワクチン中にある蛋白と同様の治療的効價あることに着眼したのは、クラウスといへる獨逸の細菌學者で、世界大戰開始の翌年、即ち千九百十五年に此の説を公にし、普通の血清が矢張り特殊の免疫血清と同じやうに腸壁扶斯に對して治癒的効果を奏することを證明した、之に次でバイフェル等も、肉汁、健康血清等を動物の腹腔内に注射して、虎列拉に對する抵抗力を増進せしめた、此の新研究は、クラウスの所説を裏書きしたものであるが、更に進んで、シユミットは、牛乳を血管内に注射して種々なる傳染病を治癒せしめ、又た、ミュレル、ウッドグレン、ヴェルデン、

デルケン、リンヂツヒ、マツク等も同じく牛乳の血管内注射によりて諸種の疾病に効果を奏し、茲に「非經口的蛋白體療法」Parenterale Proteintherapieなる新療法が成立することとなつた、併し牛乳は蛋白質の外に、脂肪、含水炭素、鹽類等を含み、従て牛乳其者の注射によりては蛋白質のみに由る單一の作用を期待すること能はざるのみならず、乳汁の血管内注射は多大の危険を伴ひ、又た牛乳中に混有せる腐敗菌を消毒する操作も中々困難であり、殊に又た牛乳注射後には惡寒、發熱、頭痛、時としては吐血、咯血、血尿等の如き劇烈危険なる副作用を伴ふ處がある故、リンヂツヒは乳汁中の有効成分たる「カゼイン」なる蛋白を抽出して之を溶液となし、牛乳の血管内注射より起る所の危険なる副作用を除去することに勉めた、而て同氏は之に「カゼオサン」Kaseosanなる名稱を附して世に發賣することとなつた。

茲に於てか起るべき問題は、乳汁等に含有せる動物性蛋白が如何なる原因理

由によつて諸種の傳染病を治癒するかと云ふ問題である、此の疑義に對して學理的説明を與へたものに、ワイハルト及びリンヂツヒ等がある。

ワイハルトは、血管内に注射せられたる動物性蛋白質體は種々なる臓器の細胞に作用して其の原形質の能力を鼓舞し (Protoplasmaktivierung) 以て全體の作業能力を充進するものなりと云ひ、リンヂツヒは異種動物の蛋白質を注射すれば、其の間なり動物なりの血液中には、細菌蛋白質を溶解する酵素を生じ若くは之を増生せしめるがために治癒的効力を呈するのであると説いてゐる、而て近時サロモンは「カゼオサン」を以て動物試験を行ひ、之を血管内に注射したる動物の血中に抗體の現出することを證明した。

此の如く動物性蛋白質の血管内注射によつて細胞原形質の作業能力の鼓舞せられ、或は細菌蛋白質を溶解する特殊の酵素の生成して治癒的効力を發揮することは、虎列拉、窒扶斯、霍布埜里、の如き急性傳染病を始め、結核、淋毒性關節炎、

傳染性生殖器病等に牛乳注射の効を奏せし事實に徴しても明かであるが、此の外、健康動物及び健康人より取りたる通常血清が、實布埜里及び流行性感冒等に効驗あることも臨床で明白なる事實となつた、此等の實驗はこれ迄の特殊血清療法やワクチン療法を根柢を覆へたもので、即ち牛乳や通常血清の注射によりても同じく免疫性物質に類似する抗體を發生し以て治癒的効果を呈せしことを立證せるものである。

此の如く健康血清の効力あることを是認するならば、往時大に行はれたる「輸血法」の實際的効價をば今日に於て回顧することも亦た徒爾の業ではあるまい、想へば今日を去ること四十七年前、即ち千八百七十四年ハツセーは仔羊の血液を輸血法に使用し、之によつて消化機關の機能を充盛し、又た造血器臓たる骨髓の作用を高め、仍て以て全身の状態を佳良ならしめ、榮養を善くし、體重を増加せしむることを説いた、固より彼れの説には誇張に失し、且つ體內に輸入

せらるゝ血液が榮養物として働くといへるが如き説は謬見なりとしても、輸血法其者が曾に出血後の全身貧血に効果あるのみならず、諸般の疾患に對しても良効を奏したことは蓋し疑ふの餘地が無い、即ち輸血法が種々の悪液性疾患以外に、肺結核、虎列拉、窒扶斯、產褥熱等の傳染病にも應用せられたことは、往時の醫家の記録に徴しても明かであるが、更に最近に至りて、ビールは健康血液の注入が急性傳染病に著効あること、又た營養の衰弱せる病者に對しても之を賞用すべきことを説いて蛋白體療法のために氣焰を吐いた。

今や乳汁、「カゼオサン」、健康血清の血管内注射は從來の傳染病の根柢をなせる特殊血清免疫療法及びワクチン療法を根本的に革新せんとし所謂「非經口的蛋白體療法」の新時代に移らんとしてゐる、而て之と同時に往時に於ては大に行はれ近代に至りて殆ど地に墜ちたる輸血法が復活の運命に邂逅せんとするが如き状態となつてきたのは何たる奇しき因縁であらう、ビールの説に依れば、蛋白

體療法の中、最も功のあるのは健康血液の血管内注射であつて「カゼオサン」注射の如きは遙かに劣ると云つてゐる。

スタイナーハ氏の若返法は信ずるに足らず

若返り信に足らず

スタイナーハ氏の若返法は、最近の學説として、醫家を始め、一般世人の注目を惹いてゐるが、併し私等の見る所を以てすれば、早かれ晩かれ學界より見棄てられて了ふこと、恰も彼のブラウンセカールの舉丸越幾斯の注射による若返法の運命と略ば同じであらうと信ずる、ス氏の動物試験の結果は兎も角、人體に就ての觀察を基礎として同氏の若返法を考察してみると、輸精管の結紮によつて若返り現象の喚起せらるゝと云ふが如き事實は容易に受け取れない説である、試みに思へ、輸精管の結紮手術はス氏によつて始めて行はれたもので無く、夙に二十有餘年前より攝護腺肥大の療法の一として外科醫の間に行はれたもので、

攝護腺肥大は人の知るが如く老人に來ること多きものであるが、若し果してス氏の言ふが如くに、輸精管の結紮によつて若返りをするならば、夙に外科醫によつて此の顯著なる事實が輸精管結紮手術を施されたる攝護腺肥大の老人に認められて居らねばならぬ筈である。又米國の二三州に於ては犯罪人の生殖能力を絶つがために輸精管に手術を施すことが尠く無い、然るに私等は今に至る迄、若返り現象の起つたと云ふ報告に接したことが無い、此のことに就てはローマイスも一言してゐる、尤もス氏の輸精管結紮手術は睪丸と副睪丸との間に於てし、外科醫の側では精系に於てするの差異はあるけれども併しいづれにしても其の結果に於ては左程の懸隔なき道理である、是に由て之を見るも、輸精管の結紮によつて若返り現象の起るといふことは容易に信ぜられない。

ス氏はリヒチンステルン氏の三人の男子に就て行つた結紮手術の成績を擧げて其の隨かに若返り現象たることを證説してゐる、併し僅か三例の材料を根據と

して、云爲するが如きは、人間に就ての若返り實驗としては如何にも其の内容が貧弱である、加之、第一例の實驗の如きは、陰囊水腫の患者であつて之に對する手術を施せし後、輸精管を結紮したものである、さりながら、ローマイスの論せしが如く、陰囊水腫患者に於ては、陰囊の甚しく腫大するがため勞働不可能となり、従つて筋力の著るしく障碍せられ全身の元氣活力の衰へることがある、ローマイスは單に陰囊水腫を除去したのみで、二三年來喪失せし勢力元氣の恢復せし一患者のありしことを記した、而て最近に至りてフロイデンベルグも、五十八歳の男子で陰囊水腫を患ひしものに就き、水腫を除去した處が、數年來全く消失せし勢力は挽回し、精神も快活となり、活動力亦た旺盛となつて、さながら新しく生れかほつたやうに感ずるに至つた一實例を報告した、さればス氏の擧げたる第一例の患者の所謂若返り現象は、果して陰囊水腫の治療せし結果であるか、或は同時に施されたる輸精管手術の結果であるかを區別す

ることは甚だ困難である、されど、上記の如くに陰囊水腫の手術のみによつて多年消失せし勢力の恢復し、所謂若返り現象に匹敵すべき結果の現はるゝが如き事實のあるに徴すれば、輸精管結紮手術と若返りとの關係が愈々疑はしくなつてくる。

ス氏の説に依れば、輸精管を結紮すれば、睾丸の實質たる細精管内には精液の鬱滯し、その結果、細精管は萎縮消耗する代りに、その反應として各細精管の間に介在する間質細胞、即ち『發情腺』が増殖し、其の内分泌作用の亢進する結果として若返り現象が起るのだと云ふ、併しこゝに注意しなければならぬことは肝臓の疾病や、酒精中毒等に於て睾丸實質の萎縮と共に間質細胞の反應性に増殖することである、併し未だ嘗て此等の患者に所謂若返り現象の起つた例證は全く絶無である、尤も間質細胞はス氏の言ふが如く第二次性徴を喚起する内分泌機關であらう、さりながら此の細胞群が同時に全身に顯著なる活力を賦

與して老衰を豫防するが如き特性を有つてゐるかは一の謎である、而て人間に於ける臨床上の實驗は、假令ひ睾丸に於て間質細胞の増殖を組織學的に證明しても、少しも若返り現象の發現せざることを立證してゐるでは無いか。抑々老衰者に於ては他の臓器に於けると同じく、睾丸に於ても、腺實質の萎縮消耗を認める、蓋しこれは老衰に於ける全身萎縮の一分徴であつて、既に老衰者にては、全身諸臓器の細胞の生活力の著るしく減退せる以上は、睾丸の間質細胞も亦た爾他の細胞同様に退化することは明かだ、私等の見る所を以てすれば、生殖腺の萎縮退化は寧ろ老衰に伴ふ處の結果と看做さねばならぬ、されば、老人に於いて輸精管を結紮し以て反應性に間質細胞を増殖せしむることを得るにしても、既に其の生活能力の減衰せる間質細胞が果してどれだけ増殖し、どれだけ其の内分泌機能を開展し得る乎、これ亦た一の疑問であらねばならぬ。私の見る處を以てすれば、輸精管の結紮手術によつて所謂若返り現象の起るの

は、ス氏の説くが如き間質細胞群、即ち發情腺の増殖に因ると云ふよりも、寧ろローマイスの言つた如く、恐らくは精液の一時細精管内に貯積し、これが血液中に吸収せらるゝ結果では無いかと思ふ、抑々精液成分が通常の場合に於ても貯積する時は精囊より吸収せらるゝことは夙にエクスネルの説いた所であり、又た一面に於ては古來劍客や闘士が其の勇氣元氣を保たんがために故意に性交を避け精液を漏泄しないやうに努めたことは、精液成分の身心に對して良好の影響を與ふることを指示するもので、這般の事實に就ては、グルーベルも論じたる所である、遜真人の「千金方」にも男子四十歳以後は血氣漸く衰ふるを以て精液を漏らさず唯だ交接すべし、斯くすれば元氣耗らず血氣循環して補益となると云ふことを記述してある、房事過度によつて精液の屢々排泄せられると、これが爲めに身心の健全の損はれ全身榮養の悪くなつてくることは周知の事實である、これは單に蛋白質の減退ばかりより起るのではあるまい、精液

中に含有せる何か一種特異の成分の吸収の減少することも亦た之に與つて力あるに違ひなからうと思はれる、是に由て考ふるに、ス氏の輸精管結紮によつて動物及び人間の一時元氣活力の恢復し、所謂若返り現象と認むべき現象の起るのは、精液の鬱滞に因る吸収の一時性増加に基因するのではあるまいか、ローマイスの説に依れば、ス氏の發表せし論文の挿圖を見るに間質細胞の新生増殖せりと認むべき形徴が能く分らないと云つてゐる、若し果して然りとせば、所謂若返り現象は、間質細胞の内分泌作用の増進に因るに非ずして、寧ろ精液成分の吸収に因るのかも知れない、是を要するにス氏の若返り法は私等より見るに甚だ疑はしいものである、同氏の性と生殖腺とに關する實驗的研究は固より内分泌學說に多大の貢獻をなせし有益確實の新研究であるが、獨り若返り法に就ての研究に至りては容易に信ずることが出来ないのは遺憾である。

徹毒の完全治癒の確定に就て

(再び花柳病患者拒婚同盟の参考にまで)

私は本書の第二輯に於て、徹毒なるものは外觀上治癒しても、復た再發することの驗からざることを述べ、其の原因は病毒の體内に於て消失せずして猶ほ潜伏する傾向のあるがため、何かの機會に乗ずると、其の潜伏せる病毒の再び勢を盛りかへしてくるに由ることを説いた。こゝでは更に徹毒の完全に治癒したか否かを確定する法に就て聊か述べてみよう。

抑々徹毒療法に常用せらるゝ藥劑は、サルヴァルサン(舊名六百〇六號)水銀及び沃度劑の三者であるが、此の三者を同時に併用するものもあれば又た別々に用ゆる者もある、併し概して言へば、サルヴァルサンと水銀との二者を交互に使用するものが多い、而て此等の藥劑は徹毒の病原たる「スピロヘーター」

を殺滅するものであるから、之によつて徹毒が全治するのである、併し「スピロヘーター」は此等の藥劑によつて悉く死滅するもので無く、其の幾分は猶ほ残存して體内に潜伏することが稀でない、されば、ウアルチンの如きは、臨床上、全治と認むべき場合にも猶ほ組織内に「スピロヘーター」の残存することがある故、現時の療法を以てしては、徹毒を潜伏状態に止め置くことは出来ても決して完全に治癒せしむることは困難であると云つた位である、併し現今多數の學者は徹毒の儘かに全治すべきものであるとの意見を有するもの多きを加へてきた、併し眞に徹毒の全治したか否かを確定するには可なり長い年月を要することを知らねばならぬ、千九百十九年英國の醫學者ダイニニツクは徹毒の完全治癒の標準として「二年間熱心に療法を施し、臨牀上、全く徹毒の症候の消失してから、更に二年の後、血液及び腦脊髄に就て、ワツセルマン氏反應を検査して陰性なる場合には、始めて徹毒の完全に治癒せるものと明言し得られる」

といひ、又た佛國の醫家ル、コムトは「梅毒患者には、其の血液がワッセルマン氏反應を呈しなくなる迄、サルヴァルサン及び水銀療法を繼續し、その後、さらに水銀療法を六ヶ月以上も持續し、尙ほ十八ヶ月間能く其の全身状態を診査し、血液、腦脊髄液共にワッセルマン反應の陰性となる時は始めて全治と斷言することが出来る」と云つた、此の如く梅毒患者に就て其の完全に治癒することを明言し得られる迄には治療を開始してから少くとも四年内外の年月を要するものであるから、單に二三回乃至數回位の診斷では、其の全治せるか否かを明言し得られるもので無い、假令ひ醫師の眼には全治したやうに映じて、實際には猶ほ病毒が體內に残存して潜伏し居ることもあり、又た、外觀上では立派な健康人のやうに見えても、其の實は過去に梅毒に罹つて猶ほ全治して居らぬやうな者もあらう、それ故、醫師の健康診斷書の如さは餘り當てになる者でない、然るに之に重きを置きて結婚の拒否を決せんとする新婦人協會の提議

の如きは、私等から見ると随分馬鹿げた話である。それから猶ほ一言注意しなければならぬことは、梅毒患者には、其の診斷上の特徴とも云ふべきワッセルマン氏反應の必ずしも發現するに限らないことで、即ち疑ひもなき梅毒患者でありながら、往々此の反應を認めないことがある、ブシユケは第二期症状もなく又たワッセルマン反應を呈せざりし患者にして、二三年の後突然脊髄癆又は痲痺狂を來たすが如き實例を引證し、血液反應を以て微毒治癒の目標となすに足らざることを力説した、此様な事實もあるから、益々以て梅毒の完全治癒の確定は困難となる譯である。結婚は神識をひくやうな者だ、健康な人間と思つて結婚しても、果してその本人が過去に梅毒に罹つて猶ほ全治しきらない者であるかも知らない、而かも醫學上完全治癒を證明することは前記の如く決して容易な業では無いのである、花柳病男子拒婚同盟を主張する新婦人達は道般の事實を考慮しなければならぬ、

長壽延命

人間は疾病若くは災害によつて生命の中絶せられざる時には凡そ何歳まで生存することが出来るか、此の問題に就ては古來種々の説があつて、ハルレルの如きは人間は二百歳まで生存することが出来るものと認めたが、併し實際に於て此の如き非常の高齡に達したるものは殆んど絶無である、私等の見る所を以てすれば、人間は百歳より百五十歳位までは生存することが出来るやうで恐らくはこれが吾人の確證し得べき最高の年齢であらう、それは英國に於て百五十二歳の長壽に達し、ハーヴェーが其の遺骸を解剖したと云ふトーマス、バルの實例に徴しても明かである、併し古記録の中には、更にこれより以上の高壽に達せし者も往々散見するが、信を措く者としては殆ど無い、彼の百八十五歳にして死んだと云ふ聖者ムンゴの事例の如きは、ハンゼマンの謂つた如く確かに虚妄の

傳説である。壽命は各種生物に於て遺傳的に固定せらるゝのみならず、亦た各個體に於ても特に遺傳の關係のあることに就ては、シャルマイエルの特に述べた處である、蓋し各人間に於て長壽に達するものと然らざる者との差異のあるのは、外部の要件に由るよりも寧ろ内部の素質に基づくことは疑ひなき事實であつて、即ち體内に於ける要約の如何に従ひ、或は長壽となり或は短命となるのであるが、これには遺傳の關係に負ふ處が頗る多いやうに想はれる、實際上高齡に達したる者の家系を調べてみると、其の子も亦た同じく高齡に達することが稀でない例之ば前記の百五十二歳の高齡に達せしトーマス、バルの息子の如きは百二十七歳迄生存し、而かも晩年に至る迄毫も氣力は衰へなかつたと云ふことである、又シユマンの如きは、父母と其の子とが同様に非常の高齡に達せし十八の實例を擧げた、既に十八世紀に於て有名なる生理學者ハルレルは百歳乃至それ以上

の長壽者が同一の家庭に出づること多き事例を述べたが、同じく十九世紀の生理學者たるブリューゲルも、長壽の遺傳することを論じた、世には過度の飲酒喫煙をなし不攝生の生活をなすに拘はらず、普通一般の人々よりも頑健であつて且つ高齡に達するが如き者も稀でない、此の如きは身體内の素質に因ることは明かで、各人は其の容貌の異なるが如く、亦た個人的素質をも異にし、遺傳的關係の存する以上は、生來長壽の遺傳なるものならば、假令ひ不攝生の生活をなしても比較的に高齡に達し得べき可能性ある事は蓋し論を俟たざる處である、佛國の文豪ヴォルテールは嘗て咖啡過飲の害を醫師から忠告せられた時「自分は八十餘年間、毒物を飲用してゐた」と傲然として答へたことがある、此の如き次第であるから、規則正しい生活を送り衛生法を守る者であつても、長壽の遺傳を有せざるものは、高齡に達することは先づ不可能と謂はざるを得ぬ、固より衛生法の遵守、秩序正しい生活、飲食の節制等によりて其の生命を延長

し得らるゝことは疑ひなき事實であるが、併し延命と長壽とは全く別物であつて、即ち眞摯謹直なる生活法のために夭折すべき生命を延長し得られるにして、長壽に達し得られるか否かは固より保證の限りでない。古來健康に害ありと稱せらるゝ飲酒喫煙に耽つても高齡に達した者の少く無いことは吾人の特に注意すべき所である、百歳までも長生した者の中には随分の大酒家もあつて、シユマンの記録せし者の中にある長壽者の多數は、好んで葡萄酒、火酒を飲み、且つ屢々之を用ゐたもので、其の中、百〇七歳までも長生せし一婦人の如きは、多量の酒を飲み、又た百〇四歳まで生存せし一男子の如きは、二十五年來每晚酒を飲んだ、又た、佛國の一地方なるシャイリ村は、住民の擧げて酒精飲料を費消する處であるが、千八百九十七年頃の統計に依るに、五百廿三人の住民中、八十歳の高齡に達した者は二十人以上もあつて、而かも此等の高齡者は他の住民よりも一層酒飲みであつたと云ふことである、又た奥

煙家の中にも長生者を看出すことが稀でない、例之ば百〇二歳まで長生せしロ
 ッスといふ人は非常な喫煙家であり、又た、百〇四歳で死んだラチエネツクと
 いへる寡婦は少女時代より好んで煙草を煙ゆらしてゐた。

又た世の中には蒲柳虚弱の體質の人間でありながら、往々高齡に達する者もあ
 る、メチニコッフの記する所に依れば、ニコリネ、マルクといへる一婦人は、
 百十歳まで生存したが、併し此の女は生後二歳の頃から左手は釣状に彎屈し、
 脊髄は後方に突出し、身長僅に四フースを出でざる不具者であつた、又たエル
 スベス、ワルトンといへる一女子は身長僅に二フース三ツオルの侏儒であつた
 けれども、百十五歳まで生存した、此の如き異常薄弱なる人間でも高齡に達す
 ることのあるのは、他に種々の要約あるにしても、亦た生來の稟賦に基づくこ
 とは必ずしも推察するに難くない、體格の如何に強壯であり、榮養のいかに佳
 良であつても、若し其の身體の素質に於て缺ぐる所あらば、高齡に達すること

能はざるは全く疑ふべくも無い、況んや不老長壽の藥劑とか稱せらるゝ何首烏
 やヨーグルト等を攝取したればとて、それで誰も皆長生の幸福を享樂し得られ
 るやうに思惟するが如きは身體内部に於ける素質の關係を閑却せるものと謂は
 ざるを得ない、生理學者ブリューゲルが、長壽の主要なる原因をば身體内部の
 事情性質に求むべきことを説いたのは慥かに肯綮に中つてゐる、同一の家庭に
 あつて同一の生活をなし同一の地方に住みて其の境遇を等しうせる人々でも其
 の享受する年齡に顯著なる差異のあるに徴しても、長壽の原因が主として生來
 の素質なり稟賦なりに存することは蓋し自明の理であらねばならぬ。
 是を要するに、長壽と延命との間には截然たる區別を劃すべきもので、即ち長
 壽は生來個人の素質稟賦に由り、延命は生後一定の方法即ち衛生法、規則正し
 い生活等によりて得らるゝ者であるから、世に所謂不老長壽法なるものは、其
 の實、延命法或は長生法と稱するのが妥當であらう。

然らば吾人は如何にして其の生命を延長し得べきか。人間の壽命は先づ八十歳乃至百歳であるが、能ふだけ其の生命を延長して、天壽若くは之に近きまでの年齢に達することは、生を享樂すべき人間の希望でなければならぬ、されば洋の東西時の古今に論なく、長生に關する方法に就て説述せる書物や論文は實に汗牛充棟も言ならざる程である、私は茲に古今の長生法を一々列擧するの煩に堪へず、又た之をなすの要あるを認めないから、唯だ私自身の長生法に對する平素の管見のみを披瀝することにして置く。

長生法の中、先づ第一に考察しなければならぬのは食物の分量と性質とである、古來長生者が之に多大の注意を拂ひたることは固より言ふ迄もないが、長生者の多數に就て之を見るに、食量の節制に勉めて少食の傾向ありしことは吾人の注目に値すべき事實である、希臘の聖哲ソクラテスが一日二食制を嚴守せしことは史上明かなる所で、若し彼れにして刑囚の身とならなかつたならば、更に

高齡に達したであらう、文豪ゲーテ、碩學フムボルトの如きも亦た二食制を守り、大哲ライブニツツ、カント等は一食制を守りて高齡に達せしことも周知の事實である、又た伊太利の貴族コルナロの如きも少食者で、其の毎日攝取せし固形食料は三百六十瓦乃至それ以下であつた、此の如く長生者は概して少食であるが、猶ほ此の他に注目すべきは長生者の多くが肉食を取ること少く或は全く之を取らざることである、この事實に就ては有名なる醫家ヘルマン、ウエーベルの實驗がある、彼れは八十歳乃至百歳の高齡者に就て其の營養的生活を調査せしに、其の多くの人は富裕の身で別に食量を制限するの要なきに拘はらず、平素の飲食量は甚だ少く、其の中には殆ど野菜を食用とし、牛乳やバター等を用ゆることは甚だ少量であり、又た牛肉、鳥肉を食することは全く破格なりし者もあつた、又たシユレーテルが、八十歳以上の高齡者七百四十四人に就て職業別を擧げたる統計に依れば、其の多數を占むるものは實に農夫であつた、

之を我國に於ける事實に徴するも亦た同様で、湯川玄洋氏が百歳以上の高齢者二百二十人につき調査せし結果を見るに、農夫が是も多く、其の常食とせるものは殆ど純植物食であつた、彼の露國の文豪トルストイの生活を見て、純然たる蔬食者であつて、あれ程の長壽に達した。

素人的常識の上から考へると、食物は人體の活力の源であるから、食物を多く取ればそれだけ身體の活力を盛にし、従つて長生すべき道理であり、又た、植物食よりも肉食の方が身體の蛋白質をより多く補給して活力を盛んにし長命を保しむべき筈であるのに、事實は全く此の常識的の考に裏切つてゐる、然らば其の理由如何と云ふに、元來吾人の榮養に必要な食量は生理的限度のあるもので、動物の如きは其の本能によりて適當の食物を適量に攝取して其の健康を維持してゐるが、人間にありては、文明の進歩、生活の向上と共に食品を種々に調理して之を美味となし、徒らに味覺の快を食ほる處から、不知不識の間に過食に傾

むき、膏粱滋味を取るを以て人生の幸福快樂の一と思ふやうになつた、フォイトが食量の標準として、毎日百十八瓦の蛋白、五十六瓦の脂肪、五百瓦の含水炭素を攝取すべきことを規定し、又た、アトウォーターが更に百二十五瓦の蛋白を攝取すべきことを説いたのは、畢竟過食に傾むき美味に慣れたる歐米文明人の生活に則つたもので、決して生理的需要の規律に適せるものと認むることは出来ないのである、果然チツテンデンの精密なる研究は、フォイトの食量標準價の二分の一乃至三分の一を以て能く榮養を維持し得ることを明かにした、而て過度に食物を攝取する時は之を胃腸に於て消化吸収するがためにも、或は消化吸収せずして其のまゝに通過せしむるがためにも、無益に消化機關を過勞せしむるのみならず、既に體内に吸収同化せられたる過剰の成分を分解して體外に排泄するためにも排泄機關たる腎臓に無益なる負擔を蒙らしめて之を過勞せしめ、健康に障礙を及ぼすことゝなる、固より過食にもならず小食にも過

ぎぬといふ食量の標準を數量的に確定することは甚だ困難であるが、併し近年歐洲諸學者の研究成績に依れば、體重一キロ瓦に對して一瓦若くはそれ以下の蛋白にて足る事が明かとなつたから、體重七十キロ瓦のものであるならば、他の養素の充分なる時は七十瓦の蛋白にて榮養を維持し得られる、されば本邦人の如き歐米人に比して體重の低い者は七十瓦以下の蛋白にて專足る譯で、即ち五十乃至五十七キロ瓦（十三貫乃至十五貫）の體重を有するものは、一日五十乃至六十瓦の蛋白で充分であつて、即ちフォイトの標準食量の二分の一にて充分に榮養を維持することが出来るのである。

此の如き次第であるから、過食よりも少食の方が健康に適し榮養上の規律に適應せることは自明の理である、それから蛋白質に富める肉類は腸内に於て種々の有機性毒物を生じ、それが血液中に吸収せられて自家中毒を喚起し、健康を害する傾向のあることは周知の事實であり、又た、肉中に含有せる「プリン」は

體內に入りて尿酸となり、腎臓や其の他の組織に有害に作用するものであるから、過剰の肉食が益々健康に害あることは固より論を俟たざる處である。上記の事實に徴すれば、古來長生者が多食を避くると共に肉食を遠ざけ以て自然に壽命を延長することを得たのは理の看易き所である、而て茲に特に注目すべきは長生者の多くが蔬食者たる事であるが、これは蔬食の便通を善くし秘結を豫防することも大に與つて力がある、これに就て少しく左に論述したい。抑々人間及び哺乳動物の大腸は糞便の貯藏機關であつて、若しそれに永く糞便の停滞すると有害なる種々の腐敗酸性産物の多く發生して血液中に吸収せられ全身を毒するのみならず、亦た局所的にも大腸内に瓦斯の多量に形成せらるゝがため、腹内の緊張壓の増加して腹部臓器を機械的に壓迫し、種々不良なる影響を全身に及ぼすことになる、されば保健上甚だ必要なることは適度に糞便を排泄して之を大腸内に停滞せしめない様にあることである、獨逸の醫家リガ

ウエルが「開業五十年間に於ける一開業醫の経験と知見」といへる著書に於て、糞便の停滞が諸種疾患の原因となり、又は之を増進することを説き、健康無病の幸福を得るの道は、實に糞便の排泄を善くし、便秘を防ぐにあることを唱へたのは洵に肯綮に中れる言である。支那の道書にも「欲得長生、腸中當清、欲得不死、腸中無滓」とあつて、長生不死たらんと欲せば、腸中を清くし、滓を留めてはならぬと説いてゐるが、これは蓋し経験上から出でた言であらう。此の如く説き來れば長生者に蔬食家の多いのは、畢竟、腸の運動を促進し秘結を阻止する植物食の作用も亦た與つて力あることは明かである。それから植物性食品と雖、之を消化し易き形態にして攝取すれば、動物性食品と殆ど其の營養的價値を同ふすることは夙にブラウスニッツの證明したる所であるから、蔬食者必ずしも肉食者に比して營養の劣れるものと看做すことは出来ない、否、之を實際上の事實に徴すれば、身體の強健にして且つ長生するものは主として

植物食を取る農夫である。

それから猶ほ長生に對して至要の關係を有つてゐるのは、精神上の影響である。人の知るが如く、精神作用の肉體に及ぼす影響は實に顯著なるもので、精神が健全であれば、身體も其の影響を受けて能く活動し、抵抗力に富んでゐるが、之に反して精神が萎縮すると、身體も亦た其の働きが不十分となり、病因に侵されるやうになる。這般の事實に就ては、拙著「間違ひだらけの衛生」中に於ても論じて置いたから、茲には詳説しない、唯だ一言すべきことは、意志の強く氣力の盛んな人の容易に老衰しないことである。その好例といふべきは大隈侯で、八十餘歳の高齢に達しながら猶ほ矍鑠として其の元氣の旺盛なること壯者を凌ぐ許りである、いつ迄も青年の積りで、活動してゐる人は精神は勿論、身體も容易に老衰しない、之に就て想ひ起されるのは、洋の東西を問はず、人の老境に及ぶと、其の活氣の衰ふるを防がんが爲めに年若き女子を其の傍に添

寐せしむる習俗のあることで、古代の猶太人には夙に此風習があり、老年の男子が妙齡に接すれば、其の元氣を恢復し生命の延長することを信じてゐた、古代の希臘羅馬に於ても此様な風習の行はれ、又た近世に於ても、和蘭の大醫ボエルハーウエーや、獨逸の名醫フエランドの如きも、老年の男子が妙齡の女子に接すれば、身體の活力が旺盛となり長生きすることを信じた、此の如きことは、詰り、其人の氣分が若々しくなり年のことなどは打ち忘れて仕舞ふからである、されば長生の要訣の一としては其の精神を快活にして何時までも青春の氣持らで居ることである、自身はもう年を取つて老人になつたといふ心が始終働いて居ると、その精神は素よりのこと、身體の上にも老衰の徴候が現はれてくる。

是を要するに、延命長生の法なるものは、身體的には過量の食物、過剰の蛋白質を取らずして食養の節制に勉め、且つ便通を善くし、精神的には快活なる樂天

的觀念を養ひ憂愁の念を省くことである、恐くはこれ以外に長生法の要訣はあ
るまい、無論、健康を維持するには衣食住を始め、日常の生活法等にも種々注
意しなければならぬが、併し生存競争場裡に馳驅して奔命に疲れ勝ちな人間が
その一舉一動を衛生の原理に適せしむるが如きことは到底實行すべからざる所
で、酒を禁ぜよ、喫煙すな、日常の食物は蛋白、脂肪、含水炭素各何瓦たるべ
きこと住居は空氣清淨にして乾燥せる土地を選べ、など、衛生上の理論のみは
立派に説くことは出来ても、さて之を實際に行ふことは中々困難である、恰も
人の世に處するには五倫五常の道を守らねばならぬと云つても、それを實踐躬
行することは普通一般の人間には容易でないのと同じである、私の見る所を以
てすれば、長生法の中、先づ第一の條件であり且つ何人も容易に行ひ得べきも
のは、便通を順調にすることである、佛人ブシャーは自身の經驗に徴して「數
年來下痢と共に身體の健康を誇りとせし人々も、下痢の停止と同時に其の健康

を害せり」と云つた、メチニコッフは腸内に於ける腐敗機轉を抑制することに依つて健康長生の目的を達し得べしとなし、酸乳及び乳酸菌の内用を推薦したが、私は此の如き方法よりも寧ろ便通を順調にすることが、健康長生上に於て第一の要件たることを信ずるものである、その方法には別に藥劑を以てするの要もなく、成るべく蔬食を攝取するやうにすれば可いので、即ち腸の運動を適度に催進する植物性物質、即ち野菜、果實の如きものを適度に取れば可い、併し秘結の傾向あるものは緩下劑を用ゆるの要がある、又た、腹式呼吸の如きも腸の運動を促進し便秘を防ぐものであるから、之を試むも亦た可なりである。

雜 纂

鶏卵の貯藏法及び新舊の鑑別法

鶏卵は人の知るが如く蛋白及び脂肪に富める有効の營養物であるが、併しその腐敗し易きことは「玉に疵」である、併し之に一定の貯藏法を施せば、其の腐敗を防止することが出来る、抑々卵の腐敗するのは、今更言ふ迄もなく、卵内に細菌の進入するからであるが、卵が輸卵管を通る間、即ち殻で掩はれない間に既に細菌が侵入するから、鶏の體外から出るまでに卵の中には早や細菌が混入してゐる、生れてから後も、殻には小さい孔があるので、それから細菌が這入りこむ、それで腐敗を防ぐには先づ第一に卵殻に附着してゐる糞のやうな汚いものを洗ひ落すのであるが、併し此際水で洗つて卵殻を濕潤せしめると、却

つて細菌の進入し易き感がある。最良の方法は細菌の發生に都合の悪い冷所に貯へることであるが、併し一般の家庭には行ひ難い、そこで家庭に於て行ひ得る方法をいへば、十%の食鹽水中に卵を浸して置くことである、十%の食鹽水中では細菌は發生發育しない、尤も卵の中に少しは食鹽水が浸みこむけれども、どうせ味をつけるのだから、別に差支は無い。

卵の新舊を鑑定するには、先づ第一に卵の兩端を舌の先きで舐めてみると、新しい卵なれば、尖つた端の方が冷く、鈍端の方が暖かに感ずる、これは鈍端の方に空氣層（氣胞）のあるからである、併し腐敗すると、氣胞の位置が變るから、兩端共に同じ溫度になる、第二には光を通じて卵を見て其の内の暗いのは腐敗したものと鑑定するのは、卵屋のやる方法である、第三の鑑定法は、卵の平均比重は一、〇九〇であるが、古くなると、水分を失つて而かも容積が同じだから、軽くなる故、之を六%の食鹽水に入れてみて、水上に浮ぶものは古

い卵と認めて可い、澤山の卵を購入する場合、一度に新舊を鑑定するには、六%の食鹽水に投ずるのが最も可い。

湯葉の滋養的價值

世人の中には、湯葉の如きものは至つてお粗末な植物性食品で何等營養的價值の無い者のやうに見くびつて居る者も多いが、決して左様でない、湯葉は實に大なる營養的價值を有せる食品の一である、人の知るが如く、豆類は蛋白質に富み、肉類に對比すべき植物性食料であるが、それより製せられたる種々の豆製品の中でも、湯葉は最も多くの蛋白質及び脂肪を有し、且つ消化率も甚だ高い、試みに左表を見よ。

	蛋白質%	脂肪%	含水炭素%
豆腐	六、五五	二、九五	一、〇五

種類	消化率		
	煮豆	豆腐	湯葉
豆乳	四、二三	一、六四	三、二二
卵花(おから)	三、六六	〇、八四	六、三五
納豆	一九、二六	八、一七	六、〇九
赤味噌	一三、四八	五、〇〇	三、九八
白味噌	一三、八三	二、八三	九、三〇
湯葉	五一、六〇	一五、六二	六、五五
脂肪	—	九六、四	九五、七
蛋白質	六五、五	九二、七	九二、六
含水炭素	八五、七	九三、三	八六、八

上記の表を見ても明かなるが如く、湯葉は豆製品中、最も多くの蛋白質及び脂肪を含んでゐる又た豆製品の消化率に就ては

即ち湯葉に於ける蛋白質及び脂肪の消化率は殆ど豆腐と伯仲してゐる。

湯葉の蛋白質量が五十一%、脂肪量が一五%で、おまけに消化率の高いことは、其の儘かに有力なる栄養品なることを明示するものである、肉類の蛋白質は太抵九十%以上の消化率であるが、湯葉の消化率も之に劣る處が無いから、誠に申し分の無い食品と謂はねばならぬ。

黒焼薬

黒焼薬

古來我國の民俗間では動物の黒焼を諸病に用ふるの風習がある、恐くは迷信から起つたものであらうと思つてゐるが、此頃偶々レオ、エクスタインの「夏季に發現する胃腸障碍の療法に就て」といへる小論文を読みしに、炭、就中、清淨なる動物炭は解毒作用のあるもので、ウィーコフスキー教授の如き、特に之を使用して佳良なる効驗を収め得ることを報告したが、動物炭は一般に中毒症、

就中「アルカロイド」中毒に用ゐられる、自分（エクスタイン）は不注意なる食養より起つた處の胃腸障碍に動物炭を試みた處が、一二日にして著るしく恢復し、重症なるものでも速に全治せることを認めたとある、若しこれが果して的確なる實驗だとすれば、動物の黒燒も多少効驗ある道理である、民間の黒燒藥も滿更棄てたものでもあるまい。

靈 談

活動と病者

吾人は身體的にも、將た又た精神的にも働くべく運命づけられてゐる。閑散無聊なる生活を送りて活動性を失ひたる人間は苦痛に堪へないものである。適度の活動は常に循環、呼吸、消化、新陳代謝を催進して健康の上に良好の影響を及ぼす許りで無い、精神を其の活動の方面に傾注せしめて、いろんな雑念の生起を防ぎ、浮世の苦惱を忘れて仕事をなし得られる、吾人が日常の經驗上能く熟知するが如く、平生何か働いてゐる間は、それに注意が惹きつけられてゐるから、身體に少し許りの刺戟を受けても一向に之を感じない、又た身體に些少の異常があつても働いてゐる間は之に注意が向かない、それ故、平素一の事業

に興味を有つて活動をつゞけてゐる人間は、いつも元氣があり快活であつて、よしや、身體に少し許りの故障があつても、それを苦に感ずることも無く、従つて神經を悩やますやうなことも無い、此の點から見ても活動は健康の維持増進に甚だ須要なる條件の一である、ウエルネル、シーメンズは『余の生活は實に麗はしかりき、何となればその功果多き努力にして且つ有利の勞動たりしを以てなり』と云つたことがあるが、吾人の生活を健全にし種々の苦悶煩悶から免れて生を享樂する要諦は實に活動其者であらねばならぬ。

此の如き次第であるから、若し今まで活動してゐた人が、何等かの事情で急にその職業を廢して閑散無爲の身になると、急に精神の緊張を失ふのみならず、他に自己の注意を惹きつけるものが無いため、自然に其の注意が自分の身心の狀態に向くやうになつて些細の刺戟や異常をも過度に感じ、果ては疾病感覺乃至妄想を惹起するが如き結果になる、活動してゐるうちは其の仕事の方に心が

奪はれてゐるから、自身の身心に注意を向ける暇もないが、一たび其の活動を止めて心を使ふことが無くなると、無爲無聊のあまりに、知らず識らず自分の身體に注意の向くやうになるのは自然の歸嚮である、況して病者に於ては猶ほ更のことで、さらぬだに身心の苦悶煩悶を訴へ勝ちなる病者が終日終夜病牀に起臥し活動を廢せるの結果、益々自體の病症に注意して心の休まる暇もなく、疾病感覺の益々増進して苦悶煩悶の度の益々加はりゆくことは自明の理である、殊に數年十數年の長い経過を取る慢性病の患者の如きは其の職業に離れ、家庭より遠ざかりて何等の趣味も無い休養生生活を續けてゐるのであるから、常に身體の疾患に因る苦悶のみでなく、前途に希望の光明の無き數奇悲惨の運命に對する悲觀も之に加はつて益々精神を痛め、二重三重の苦悶に襲はれる、よしんば、醫藥に親しみて身體の疾患の幾分かは輕快した處が、活動を全廢して社會から隔つた慢性病者は其の身心に新たなるいろ／＼の苦悶が起り、又た既存の

苦痛はそれがために益々激しくなつてくる、ブツチルザツクも記したやうに、一の苦痛を忘るゝ代りにはそれと反對に又た新らしく感覺せらるゝ苦痛や、又た前から存在せる苦痛が昂まつてきて、それが因となり果となり、一生身心の苦痛から免れ難いやうな状態に陥つて了ふ。

されば慢性病者と雖、未だ其の重態篤疾に陥らざる限りは、その身心の堪へ得る程度に於て相當の活動をなさしめ、之によつて多少なりとも自分の身體に注意を向けることを防ぎ、疾病感覺の増進を制限することは療養上頗る必要の件である、然るに従來醫家の慢性病患者に對する處置を見るに、這般の事實に留意せず、肺結核、心臟病患者としいへば未だ初期のものであつても直ちに休養を命じ、轉地を勧め、活動を廢止せしむるを以て治療的要件の一なるが如く心得てゐる、併し此の如きは畢竟病者の心理を解せざるの致す處と云はねばならぬ、急性病患者ならば、之に安靜休業を命じても、其の時日のいかに長くかゝ

つた處で、二三月以上を出でない、又た急性熱性病患者の如きは精神の臟腑となり、意識の滯濁してゐるがため自覺症狀に關する苦痛とてなく、従つて之に注意を向けることもない故、活動を廢しても決して差支は無いが、慢性病患者で意識が明瞭であるものには、長年月に亘る休養生生活を強ふるには療養上甚だ宜しくない、されば慢性病患者と雖、適宜に活動をなさしめ、又は其の趣味に適することを爲さしめて自己の疾患に注意を向けないやうに仕向けるのは最も必要である、又た之を他の一面から見ても、其の生命とする職業を廢止する時は之がために經濟上種々の心配苦悶が起り、又た社會と隔絶する寂寞無聊の生活は憂愁の情緒を誘起し、それだけ益々身體に不良の影響を與へるやうになる、いかに空氣の清き山紫水明の地に轉地療養した處で、常に經濟上の心配、家庭に關する懊惱、自己の疾病の不治に對する悲愁の念が絶えないならば、假令ひ清潔なる空氣を呼吸し、風光明麗なる自然に接しても、其の心配や煩悶や

悲愁のために呼吸は淺表となり、心臓の働きは緩慢とならざるを得ない。されば轉地療養をなすよりも、適度に身心を活動せしめて疾病感覺を他に導き、種々の雜念の起るのを防ぐやうにするのが、何よりも肝要である。假令ひ結核病の如き慢性病に罹つても、適度に活動するならば、之がために氣分も快活となり元氣が出て、自然に血行も善くなり、呼吸も順調となつてくる。外界の空氣の善惡を吟味するが如きは、言はゞ第二義の話であつて、新鮮なる空氣や滋養物等に重きを置き、之によつて容易に呼吸、血行、榮養の善くなるやうに思ふのは物質的療法に囚はれたる短見である。

人口問題と新マルサス主義

『生めよ殖えよ、地に満てよ』といつた神の命令を最も忠實に忠實に實行しつゝある民族の一は我が日本人である。蓋し我國は往昔より天益人といふ名のあ

る通り、太古以來人口の増加しつゝあることは顯著なる事實であるが、近い處では明治五年には三千三百餘萬人の人口は明治二十五年には四千百餘萬となり、大正二年には五千三百三十六萬餘となり、大正五年の末には五千五百六十四萬に達した、實に驚くべき増加である。江戸幕府時代の三百年間は泰平無事なりしにも拘はらず、人口の増加が案外に進まず、例之ば享保十一年には全國の人口二千六百五十餘萬人で、弘化三年には二千六百九十萬餘になつてゐるが、此間百二十年の長星霜中に人口増加の僅に三十五萬八千餘に過ぎないのは、墮胎殺兒の行はれたるの外、公衆的及び個人的衛生の不完全で、疫病の屢々起り、又た飢饉等のありしがためであつた、然るに明治時代に入りてより急速度を以て人口の増加し、近年に於ける増加の數は毎年太約六七十萬であつて、本年に至つては人口數五千七百萬許りに達してゐる、此の如き人口の激増は之を一面より見れば日本民族の膨脹、國運の隆盛に赴く徵候として慶賀すべき現象であ

らうが、併し他の一面より見れば、必ずしも喜ぶに足らず寧ろ寒心すべき現象と謂はなければならぬ。

抑々人口増加の利害得失に就ては須らく其の邦國、其の時代の事情を充分に參考して初めて正當の批評解決を下すべきである、人口の既に稠密にして其の増加の更に激しい國にても、之に應ずる物資生産力の著るしく發達してゐるならば人口の増加も別に憂ふるに足らない、之に反して人口既に充實して國內に溢れ、而かも海外に發展すべき餘地少く、社會民衆の窮迫年を遂ふて増加する國にありては人口の増加を制限するの要がある、這般の見地から我國の現在及び將來に於ける人口問題を觀察する時は、私共は人口制限の已むべからざる所以を力説せざるを得ない。

吾人の見る所を以てすれば、人口の増加を歡迎する論者は「メルカントリズム」(重金主義) 或は軍國主義の信者が多いやうである、思ふに、國を強しく兵數

を昂めるには人口を増加するの要があり、又た一方に於ては勞働者の數を多くして産業を發達せしめ、他の一方には國家の歳入を増加して國富國權の擴張を謀るには一國の人口を増加しなければならぬと云ふ見地から人口の増加を欲望するのである、併し、一國の健全なる發達は單に其の國民の數量の問題に非ずして同時に又た其の質の問題なることを銘記しなければならぬ、若し單に人口數の多きを以て國運發展の基礎とするならば、印度支那の如き豊富なる人口を有する國は夙に世界に覇を稱して居らねばならぬ筈である、歐洲列國が前世紀の末葉以來年々出生數の減少しつゝありしことは周知の事實であつて、幸ひに死亡率の低いがため人口の甚しく減少することは無いけれども、文明國に於ける出生率の逐年減少する傾向のあることは到底掩ふことが出来ない、それでも文化は日に月に進歩して國力は充實した、試みに千八百八十一年より千九百〇七年に至る間、英佛獨三國に於て人口一萬に對する年々の出生數を調査する

に左の如くである。

年次	英國	佛國
一八八一—一八八五	三三五	二四七
一八八六—一八九〇	三一四	二三一
一八九一—一八九五	三〇五	二二四
一八九六—一九〇〇	二九二	二二〇
一九〇一—一九〇五	二八一	二一三
一九〇六	二七〇	二〇五
一九〇七	二六三	一九七
一八八一—一八九〇	三八二	
一八九一—一九〇〇	三七四	

此の如く年を逐ふて出産数の減少する傾向は獨逸に於て見受けられる、即ち

一九〇一	三六九
一九〇二	三六二
一九〇三	三四九
一九〇四	三五二
一九〇五	三四〇
一九〇六	三四一
一九〇七	三〇二

右の如く歐洲列強の人口生産数は前世紀の八十年來、大體に於て著るしく減少するやうになつた、人或は之を以て文明に伴ふ所の餘弊なりとし、未婚、晩婚、避妊、墮胎等に基づく結果と看做す者もあるが、併し他の一面から考ふる時は、人間が文明に進む程、其の生殖能力の低減することは否定すべからざる事實である、之を動物界に徴するも、下等動物ほど澤山の子を生み、高等に進むほど

少数の子を生むが如く、人間に於ても生殖力の強大なるは野蠻なる黒人種で、黄人種之に次ぎ、白人種に至ては遙かに弱くなつてくる、されば生殖力の強く繁殖力の大きな民族は未開の一證とせられる、之を各國の人口増加率の多寡に徴するに、毎年人口増加率の最も高いのは、新西蘭の二六、五であつて、之に次ぐのが亞爾然丁の二二、〇、伯刺西爾の一八、九、濠州の一六、六、塞爾維の一六、〇、智利の一五、〇である、此點より見れば日本人口増加率の一四、七六（明治四十一年より大正二年に至る五年間）の高率を示してゐるのは、あまり賞揚することが出来ない、又た文明國に於ても一般に智識階級及び富者に生兒數の少く、之に反して下層階級に多兒の傾向あることは誰も認むる所で、我國には『貧乏人の子澤山』といへる諺があり、又た佛國には『農夫は紳士よりも多兒なり』といふ諺もある、其他、洋人の常語に『子に富む者は智に貧し』と云ふのもある、生殖力と智力との反比することは實際上の事實が之を證明してゐる。

上記の見地より見ても、人口問題は單に其の數の問題のみに非ずして、同時に質の問題なることが明かである、無智なる下等社會の人口の増加は之を優生學上より見ても決して喜ぶべき現象でない、然るに往古に於ては人口の増加を喜び、今に至るも、猶ほ溢ることの無いのは、如何なる理由かと云ふに、私の見る所を以てすれば四種の理由があるやうに思ふ、第一は戦争を事とし國土の擴張を圖るに汲々たる古代にては、人口の増加就中、兵士たるべき男兒の出生の多きを喜んだことである、此種の思想は今に至るも軍國主義國家主義者の抱く處であつて、即ち人口の増加を以て國家の發展、民族の膨脹、兵力の充實に缺くべからざる要素と信じてゐるのである、第二の理由は、古代に於ては未懸の地多く且つ人口の稀薄であつたから、人口の増加を歓迎したのである、第三の理由は、國內に生産事業を發達せしめる必要

上、人口を多くして労働者の数を増すがためであつた、第四の理由は祖先を崇拜する國にては子を多く生むを以て祖先に對する義務なりと信じてゐたことである、此様な種々の思想は今に至るも猶ほ人心の奥深く刻まれて、人口の制限に反對し、之を以て國家社會に對する罪惡のやうに看做すものが多いのである。さりながら海外諸國のことは姑く措き、近年の我國の狀勢に就て考ふれば、上記の如き思想の機宜に適せざることとは明かである、今日は軍國主義既に地に墜ち、國土の擴張を謀るが如き侵略主義の許るされざる時代となつた、されば軍國主義の立場から人口の増加を獎勵するやうなことは、今日では時代錯誤と謂はなければならぬ、又た國權の發展、民族の膨脹の上から人口の増加を獎勵するが如きは、彼の英國のやうに海外に多くの領土を有し、又た米國のやうに宏大なる國土を有する國に於てのみ唱導すべきとであつて、我國の如き領土狭く且つ海外に發展すべき餘裕にも乏しい國に於て徒らに人口を激増せしむるの

は、却て人口の過剩となり、従つて生活に必要な物資の不足を來たし、生活の困難を甚しからしむるに至ることは論を俟たざる所である、而て今や此の事實は現下の事實となりて現はれ、多數の民衆は逐年生活の脅威を感じることを愈々甚しく、所謂民に飢色あり野に餓孚あるが如き不安の狀態に迫つてきた。然るに世の樂天論者の中には、十九世紀時代に於ける英國の國運發展の事蹟を引用し、英國の最も隆盛に赴きし十九世紀時代は即ち人口増加の最も激しかりし時代なることを論じ、之に關するカニングムの説を擧げて『近世英國の世界に覇を稱ふるに至りし所以のものは、其の始め、内に人口充溢して社會の窮迫日に月に加はり又た如何とも爲すこと能はざるに至りしより國民は苦心慘憺の結果、遂に海外に向つて其の力をつくしたるの結果に外ならず』と云ふものがある、成程此の説は尤もであるが、併しそれは海外に多くの廣大なる殖民地を有し民族の發展に何等不自由を感じざる英國に於てのみ當て嵌むべき説に過ぎ

ない、我國のやうに、國內に人口の溢れても之を海外に吐き出すこと能はず、世界殆ど到る所より排斥せられ、移民殖民の自由餘裕なきが如き國では實に思ひも寄らぬ話である。

明治初年以來、我國の人口が一分から時として一分五分に至る迄の増加率を以て急速に増加しつゝあることは實に最近五十年來に於ける新現象である、而て此の激増せる人口の國內に汎溢せる結果として、食糧供給の不足を告ぐること、年を逐ふて益々甚しくなつてきた、蓋し日本内地に於ける米穀の生産高と消費高との平均を保つてゐたのは明治二十九年迄であつて、明治三十年以來は逐年消費額が生産額に超過し、既に明治四十年には不足額三百萬石に達せるが如き勢で、或る經濟學者の説に依れば、今後二十年を超過すれば七百萬乃至千萬石の不足を生ずる勘定となつてゐる、固より此の不足高の幾分は外國米の輸入によつて補給せらるゝことは出来ても、消費高を掩ふに至ることは全然不

可能である、今假りに今後二十年に於て人口七千萬人に達するものとし、而て一人の平均米消費高太約一石とする時は、米の消費量は二十年後に於て七千萬石以上となる譯で、今後内地の米増収額を千萬石と見積つても全體の米産額を六千萬石内外とすれば、差引き千萬石の不足を生ずることになる。

此の如く米の供給が年を逐ふて益々不足勝となり、之れに伴ふて米價の暴騰して民衆の生活を脅威すること益々甚だしくなるのは、取りも直さず人口増加率の急速度を以て毎年進むに由るからである、吾人は此點に於てマルサスの人口論を憶起せざるを得ない、マルサスは人間は常に其の食物以上に増殖する傾向を有すとなし、此の不斷的増殖の結果、貧困、罪惡の生ずる所以を説き、是等の罪惡貧困を除去するには須く先づ人口過殖の自然的傾向を防止すべきことを主唱した、固より此の人口論に對しては、ケリー等の反對論もあつて、人口の増加は却つて食物の増加の結果なりと云ふやうな異説も出たが、併し近世に至

てはマルサスの人口論の核心たる「人は其の生活資料以上に増殖する傾向あり」といへる論定は最も不動にして又た最も重要な自然法なりと認めらるゝに至つた、試みに千九百〇五年、獨逸に於ける經濟學の泰斗ワグネルの誕生七十年祭紀念叢書中に掲載せる獨逸知名の經濟學者ハインリッヒ、ドイツエルの『マルサス説に對する論争』と題せる論文を見ても、マルサスの説の眞理にして到底動かすべからざる所以を論定してゐる、思ふに今後いかに文明の進み科學の發達し、生産技術の改善せられても、人口が其の生活資料の増加以上に増加する傾向ある以上は、人類は其の生殖能力に制限を加へざる限り永遠に貧困と罪惡とより免るゝことは出来ない、但し近年獨逸の生理學者ニコライは、人類が戰爭を全廢し、游食階級の奢侈を絶たしめ、相共に協同して生産に努力すれば、今日の世界の人口が二百倍に増加して三千億に達するとも、尙ほ之を養ふだけの生活資料を生せしむることが出来る」と云つたが、併しこれは机上の思索であ

り、又た現代の制度の下に適用せらるべき説でない。

人口が生活資料の増加以上に増加することは不動の自然法であるから、若し人口の激増する時は、國內に於ける生存競争が甚しくなり、延ひて生活難を將來して社會の經濟及び道德の根柢を危殆ならしむることは固より其の所である、然るに進化論者にあつては、生存競争によつて自然淘汰優勝劣敗の起り、之がために社會の進化するとの前提から弱肉強食なる現社會の自由競争を是認し、従つて人口の増加を以て寧ろ社會進化の原動力のやうに解するものが少く無い、さりながら此様な見方は畢竟生物界に於ける自然淘汰優勝劣敗の理法を直ちに人間社會に當て嵌めんとする偏見である、人間社會には經濟組織といふものがあり、人間の生活は之によつて維持發展する、動物や植物は唯だ自然界に左右せらるゝに過ぎぬが、人間は自然界以外に、人間其の者の作りたる社會經濟組織の影響を受けなければならぬ、ことに私有財産制度の下に分業の固定し階級

の生じたる現社會に於て、人間の經濟的生活が頗る複雑多端となり、従つて其の生存競争の生物界に於けるが如き生存競争と全く其の性質を異にすることは自明の理である。されば一國內に於て人口の激増し、生存競争の激烈となる時は之れがために人間の經濟的生活は甚しく動搖不安の状態となり、延いて道德生活の方面にも影響を及ぼすに至ることは論を俟たざる所である。貧困、無學、犯罪、疾病等が人口の激増に基づく生存競争の激甚なるに由來することは今更ら多言を要しない、殊にプロレタリア階級に於ける人口の増殖が益々彼等をして窮乏の状態に陥らしめ、病者犯人を踵出して社會國家に不測の害毒を及ぼすことは顯著の事實である。されば此の點から見ても、人口の激増が一部の進化論者の思惟するが如くに社會の進化を促すものに非ずして却つて退化を來すことを肯定し得られる。

人口の過殖が前述べたるが如く、社會經濟及び道德に害を及ぼし、人間社會

の退化を來たすの虞ある外に、猶ほ吾人の寒心すべきことは、文化に對して非常なる損害を與ふる戰爭が國內に於ける人口の増殖より勃發するの憂にあることである。今次の世界戰爭の責任者たる獨逸が自から進んで戰爭を誘發したのは國內に甚しく人口の増殖せる結果、その吐け口を他國の領土に求めねばならぬ必至の運命に達着したことが大に與つて力がある。此のことは獨逸有名の醫學者グルーベルも論じた所で、即ち獨逸にては過去四十年間に人口の四千萬人より八千萬人に増殖したことが戰爭の誘因の一となつたのである。又た獨逸に於ける社會黨の名士グワイットも過去半世紀に於て獨逸の人口が非常の増加をなさなかつたならば、戰爭の起る筈は無かつたと議會に於て演説したことがあつて、蓋し獨逸は千八百八十年代より年を逐ふて生産率の減少し、二十世紀に入つてよりは毎年太約一%づゝの減少を告げたが、それでも死亡率の著るしく減少したが爲めに人口は逐年増加した、尙ほその上に獨逸の軍閥や其の意向を迎

へる學者論客が、生兒の減少は獨逸國の膨脹發展を妨害するものなりとし、由々しき國家問題なりとして大に説き立てたから、英佛二國のやうに出産率の減少の少かつたのと、一面に於ては醫術衛生の發達のため死亡率の著るしく減少したので、人口は毎年増加した、而て其の結果は人口の吐け場に困るやうになり、どうしても領土を擴張せねばならぬ必要に迫つたので遂に乾坤一擲の大戦を試むやうになつたのである。

我國に於ても日本膨脹論領土擴張説を唱ふるものは、いづれも生々主義を主張し人口の増殖を獎勵する、併し今や我國は人口の國內に溢れて食糧の供給年を逐ふて不足を告げ、物價月に年に騰貴して生活難の聲益々高く、而かも海外に移民殖民するの自由を有せず、殆んど到る所に排斥せられ、又た民衆の思想は甚しく險惡化して社會國家の基礎漸く危からんとするの秋、國民たる者は國家のため子孫のためを思ひ、人口を調節すべく生殖力を制限しなければならぬ、

又た一面に於ては勞働問題が重要な社會問題の一となつてゐるの今日、勞働階級をして人間らしい生活を営ましめ其地位を向上せしむるには、先づ第一に「プロレタリア」の語原たる「プロレス」Polos 即ち子供澤山の事實を改廢せしむるの要がある。

こゝに於てか吾人は新マルサス主義の宣傳の今日に必要なことを切實に感ぜざるを得ない、新マルサス主義は今更こゝに詳説する迄もなく、社會經濟的見地より過剰の人口増殖を制限し、貧困、惡疾、犯罪等の發生増加を一定程度まで防止せんとする目的から起つたもので、單に個人的享樂の目的より産兒を制限するのでは無い、つまり、生殖の調節によつて人口の過剰増殖を防ぎ、産兒の量を少くすると共に其の質を善くせんとするのが新マルサス主義の根本主義である、就中、『貧乏人の子澤山』なる諺を實行しつゝある下層階級の無思慮無反省なる生殖過多を制限して、彼等の社會的地位經濟的境遇を改善向上せしめ、

無教育或は低能なる小兒の増加を減却せしめて社會に及ぼす不良の影響を防遏するには新マルサス主義を彼等に宣傳實行せしめなければならぬ、又た個人衛生の見地より觀るも、頻回の出産、哺育が如何に母體の健康を害し、如何に母性の修養を妨ぐるかは論ずる迄もなきことで、加之、其の産兒の體質にも悪化を來たすに至ることは事實上掩ふべからざる所である、グルーベルは其の著、『生殖衛生論』に於て、第四番目の子供より先天性の體力及び健康の次第に減退することを述べた。

吾人々類は下等動物のやうに漫りに多くの子を生んで、其の兒の生死を自然に任かすべきもので無い、必ずや之を充分に教育し養成し得られるだけの範圍程度に於て後繼者をつくるべきである、ホフマイエルの論ぜしが如く分娩數の減少する時は従つて死亡數も減少するもので、それは小兒の數の少ければ従つて其の保護も能く行き届くからである、文化低劣なる種族に於ては、生産數の

多きと共に其の生兒死亡數も亦た多いことは周知の事實であつて、吾人より之を見れば實に不經濟極まる種族繼續法と謂はねばならぬ、多くの子を生むとも生存するものが僅少ならば始めより多くの子を生まぬが優しである、殊に我國の如き小兒死亡率の甚だ多い國にては猶更のことで、之を生物界の事實に徴しても、下等動物は多くの子を生めども生存するものは甚だ少く、高等動物は少數の子を生めども死亡する者も少い、生殖作用に忙殺されてゐる下等動物が高等の發達をなすと能はざるが如く、人間に於ても、多兒を生む野蠻人や、「プロレタリア」階級は其の境遇地位を向上することが出来ない、従つて彼等は多くの子供を生んでも完全に育ち、完全に教養せらるゝものは少いのである。

新マルサス主義は吾國の人士間にも非常に誤解せられ、恰も人工的避妊法の別名の如くに思つてゐるやうな者も尠く無い、併し此の主義の根本的精神は社會經濟的見地より人口の過殖を調節して多少なりとも近代の社會的缺陷を救は

んとするにあるので、決して個人的享樂の欲望を動機として起つたものでない、人若し新マルサス主義の先鋒とも云ふべきジョン、スチュアート、ミルやチャールズ、ドライスデール等の意見を讀むならば蓋し思ひ半に過ぐるものがある、又た此の主義に共鳴せる醫學者ヘガール、グルーベル、レーウエンフェルト等の著書を讀むならば、此の主義の個人的及び社會的衛生上に於ける意義價值を理解することが出来る、然るに新マルサス主義を以て純然たる人工的避妊法の別名のやうに思惟し、個人的享樂の欲望より起つたものゝやうに説き立て、其の罪惡なることを力説するが如きは實に新マルサス主義を誣ふるの甚しきものである。

然らば一の夫婦間に幾人位の子を儲くべきかといふに、吾人は我國の諺にも男二人に女一人を子長者と唱へるやうに、三人あればそれで足れりと思ふ、又た佛國は二兒制の國であるが『男一人、女一人、及び補缺』『*Un fils une fille et pour*

in Case の古諺もある、又た獨逸有名の婦人科學者ヘガールも『二人乃至三人の小兒以上存在せざる限りは萬事都合よく行く』『*Solange nicht mehr als Zwei bis drei Kinder vorhanden sind, so geht alles ganz gut*』と言つた、然るに世の中には産兒を制限するのを一種不徳の行爲として反對するものも尠く無い、さりながら此様な反對は固より小繩墨に囚はれたる偏見である、レーウエンフェルトは『現時豫防的性交の世に多く廣がり且つ其増加するを見て、之を單に風俗頹廢の一徵候と認むるものありとせば慥かに誤りなり、豫防的性交は現時の社會的關係に對して毫も道德的墮落を意味せず、却つて之と反對に道德的水準を高むるものなり』と言つたが、實に此の通りである、之を前述の社會的經濟的關係から見ても、又た母體の健康、産兒の體質上から論じて、兒數を制限することは必要の條件である。

結核豫防運動

結核病豫防上の施設は最早や議論の時代より實行の時代に入れるの今日、私共は結核豫防に關する諸家の言説を見て憚焉の感なきを得ない、現に昨年の八月岐阜市に開催せられたる結核豫防聯合會の事態に徴するも、相も變らず議論百出の爲態であつて、其の議案の如きも、或は中學生に對し科外講話として公衆衛生上の知識を授けよと云ひ、或は師範學校の教科書中に公衆衛生の科目を設けよといひ、或は全國統一的の結核豫防的標語を選びて汎く公衆に宣傳すべしといふが如き、何ぞ其の議論の屑々たる、此の如くにして世界的疾病たる結核病を豫防し得べくんば、談亦た甚だ容易なりと謂はざるを得ない。

結核に對する根治療法の發見せられざる限り、國民體質の改善せられざる限り、社會政策の徹底的に實施せられざる限り、結核は到底撲滅せらるべきもので無い、併し今日に於て結核の豫防の上最も緊要なる一事は、世人の結核病に對する恐怖心を去り、同病の何等恐るゝに足らざる治癒的疾患なることを一般公衆に宣傳することである、然るに結核豫防運動に従事する人達の言説を見るに、こと更に聲を高くして結核病の恐るべく戒むべきことを力説するから、世人は結核患者を恐怖嫌忌すること甚しく、従つて患者は其の病の人に知らるゝを恐れ、他人と談話し又た咯痰を出す際にも、自ら適當の措置を取らず、その結果、益々病毒の散命せられて公衆に危害を及ぼすこと愈々大となるやうになる、若し世人にして結核病の必ずしも不治の病に非ることを知り、妄りに結核患者を嫌忌せず、患者も亦た談話、咳嗽の際、飛沫の散布に注意を拂ひ、唾壺に痰を咯出する慣習とならば、結核の豫防上、相當の効果を擧ることは決して

困難でない、然るに結核豫防會の入達が、あまりに聲を大にして結核の恐るべきことを高調するがため、却て結核豫防の實を擧ぐるを得ず、病毒の蔓延を助成しつゝあるのは、何たる矛盾ぞやと言ひたくなる、假令ひ中學校師範學校の科目の中に公衆衛生の一科を設けても、相も變らず結核の恐ろしきことを説き、之が傳染の危険を教ゆるが如きことでは、愈々青年學生の結核に對する恐怖心と嫌忌の情とを挑發するに過ぎない、而て其の結果は益々疾病を人前に隠くすの惡風を生じ病毒の散布を助長するのみである、吾人常に人に語つて曰く、結核病を増悪せしめ、病毒を散布せしめて益々傳染の機會を多くせしむるものは、實に結核豫防運動に従事せる人々の責任である、春秋の筆法を以てすれば、病毒蔓延の罪は結核患者其人にあらずして醫師及び豫防運動者其人であると、吾人は此の語の必ずしも酷ならざるを信する者である。

大正十年七月五日印刷
大正十年七月十日發行

家庭新智識(8)
定價金七十錢

著者 田中祐吉 大成

發行者 東京市日本橋區數寄屋町一番地 濱井松之助 社成

印刷者 東京神田區西小川町二丁目六番地 官田龜六 刷印



發兌

東京日本橋數寄屋町
振替東京一三七五番

大阪屋號書店

電話本局 四二八九番

前大阪醫學校病理學教授

田中香涯先生著

發兌

東京日本橋數寄屋町

大阪屋號書店

振替東京一三七五番

(五版) 間違だらけの衛生

定價壹圓九拾錢
書留送料拾五錢

(三版) 智識と趣味 人體に關する面白き話

定價貳圓八拾錢
書留送料拾七錢

(近刊) 科學上より見たる 靈

と

肉

(未定)

醫學博士 額田豐先生著

(三版) 病弱を轉じて健康へ

定價金貳圓
書留送料拾五錢

醫學博士 額田豐先生講評

獨逸アドルフユスト原著
寒川風骨先生譯

(六版) 天然生活法

定價壹圓八拾錢
書留送料拾五錢

60
702

終

